

# 日系二世・戦後移民はなぜウジミナスへ入社したか

——日本鉄鋼業による対ブラジル技術移転（4）——

長谷川 伸

- I はじめに
- II 入社理由(a)日本のために日本語とポルトガル語の運用能力を活かしたい
- III 1930年代以降のブラジルにおける日本語教育
- IV 入社理由(b)待遇
- V 入社理由(c)ウジミナスからの要請
- VI 入社を決める際の懸念材料
- VII おわりに

## I はじめに

前稿（長谷川，2009）で我々は，1950年代末から60年代前半にかけてのウジミナス建設・操業開始期に大量に採用された日系社員に焦点をあて，ウジミナスが日系人に求めていた人材像と，その要求に叶う日系社員の大量採用を可能にした背景を下記の通り明らかにした。

「ウジミナスの要求に応えられるだけの優れた人材，つまり一般常識に明るく，日本語・ポルトガル語両方の日常会話とある程度の読み書きができる層は，主としてブラジル生まれの第1世代である二世，幼少期に渡伯した移民である準二世によって構成される。この層は，主として二世の親の世代（戦前移民）の手によって学校あるいは家庭での日本語・ポルトガル語の学習機会が与えられたことにより，形成されてきたものである。しかも，移民50周年を迎えたばかりの1960年代初頭は，二世が労働市場に大量に参入してきた時期に重なってウジミナスが日本語もポルトガル語もできる二世を大量に採用するにはタイミングが良かったといえる。同時に数は少ないが，戦後移民も供給源となったことにも注目すべきである」<sup>1)</sup>。

ただし，当時こうした人材がウジミナスにとって必要とされ，かつ採用可能であったとしても，それはあくまでも可能性に過ぎない。その可能性が現実のものとなったのは，彼らがウジミナスへの入社を自ら選択したからに他ならない。前稿において指摘したように「募集対象者の何割が応募・入社するかは，その時の社会の状況と本人の事情に左右されるであろうし，ウジミナスへの入社がどれほど当時の日系人・日系社会にとって魅力と意義のあるものであった

1) 長谷川（2009），66頁。

のかにも依存する。住み慣れた土地から遠く離れた地に赴任することにも相当の抵抗があったはずである」<sup>2)</sup>。日系社会の優れた人材たる彼らをしてウジミナスへ入社せしめた事情にはいかなるものがあったのか。それが日系社員の世代（一世あるいは二世）と経歴といかなる関係が見られるのか。これが本稿の課題である。

前稿で言及したように「こうしたことの実態を知るには、現時点ではもはや当時入社した日系社員からのインタビュー取材を積み上げていく他はない」<sup>3)</sup>。このため、我々は当時の日系社員に対してインタビュー取材をこの間行ってきた。今回利用するのは元日系社員10名のインタビューデータである。インタビューはブラジルにおいて2006年から2010年にかけての5年間にわたって行われた。事実関係などについては必要に応じて、他の関係者からのインタビューデータと文献資料で補強する。

今回使用するインタビューデータ10名の内訳は下記の通りである（表1、表2）。世代で見ると一世6名（うち戦後移民5名）、二世4名となっている。出生年でみると、1920-24年2名、1925-29年2名、1930-34年2名、1935-39年3名、1940-44年1名となっている。一世6名についてみると、渡伯年は1922年1名、1950年代後半（1955-59年）5名となっている。渡伯形態で見ると単身1名、家族5名となっている。渡伯年齢は、5-9歳1名（いわゆる準二世）、15-19歳1名、20-24歳3名、25-29歳1名となっている。入社年齢で見ると、20-24歳2名、

表1 インタビュー対象者のプロフィール

イニシャル	出生年	世代	出生地	渡伯年	渡伯年齢	渡伯形態	入社前居住地	入社年	入社年齢	入社時学歴	入社時職位
IY	1922	一世 (準二世)	日 本	1929	7	家族	サンパウロ州 サンパウロ市	1958	36	大卒	技 師
HS	1924	二世	ブラジル	—	—	—	サンパウロ州 サンパウロ市	1958	34	大卒	技 師
HM	1927	二世	ブラジル	—	—	—	サンパウロ州 リンス	1960	33	高卒	事務員
MS	1928	二世	ブラジル	—	—	—	サンパウロ州 サンパウロ市	1960	32	高卒	事務員
AK	1930	一世 (戦後移民)	日 本	1956	26	家族	サンパウロ州 リンス	1962	32	高卒	技術員
WK	1933	一世 (戦後移民)	日 本	1956	23	家族	サンパウロ州 リンス	1962	29	中卒	工 長
JO	1936	二世	ブラジル	—	—	—	サンパウロ州 リンス	1962	26	高卒	事務員
YI	1936	一世 (戦後移民)	日 本	1956	20	単身	パラナ州 マリンガ	1962	26	高卒	技術員
TM	1938	一世 (戦後移民)	日 本	1959	21	家族	パラナ州 ロンドリーナ	1962	24	高卒	技術員
HK	1940	一世 (戦後移民)	中 国	1959	19	家族	サンパウロ州 モジダスクルーゼス	1962	22	高卒	事務員

2) 長谷川 (2009), 65頁。

3) 長谷川 (2009), 65頁。

表2 インタビュー対象者の内訳

		一世		二世		計
対象者数		6		4		10
出生年	1920-24年	IY	1	HS	1	2
	1925-29年	-	0	HM, MS	2	2
	1930-34年	AK, WK	2	-	0	2
	1935-39年	YI, TM	2	JO	1	3
	1940-44年	HK	1	-	0	1
渡伯年	1922年	IY	1	-	-	1
	1955-59年	AK, WK, YI, TM, HK	5	-	-	5
渡伯形態	単 身	YI	1	-	-	1
	家 族	IY, AK, WK, TM, HK	5	-	-	5
渡伯年齢	5-9歳	IY	1	-	-	1
	15-19歳	HK	1	-	-	1
	20-24歳	WK, YI, TM	3	-	-	3
	25-29歳	AK	1	-	-	1
入社年	1958年	IY	1	HS	1	2
	1960年	-	0	HM, MS	2	2
	1962年	AK, WK, YI, TM, HK	5	JO	1	6
入社年齢	20-24歳	TM, HK	2	-	0	2
	25-29歳	WK, YI	2	JO	1	3
	30-34歳	AK	1	HS, HM, MS	3	4
	35-39歳	IY	1	-	0	1
入社時学歴	大 卒	IY	1	HS	1	2
	高 卒	AK, YI, TM, HK	4	HM, MS, JO	3	7
	中 卒	WK	1	-	0	1
入社時職位	技 師	IY	1	HS	1	2
	技術員	AK, YI, TM	3	-	0	3
	工 長	WK	1	-	0	1
	事務員	HK	1	HM, MS, JO	3	4

25-29歳 3名, 30-34歳 4名, 35-39歳 1名となっている。入社時学歴は, 大卒 2名, 高卒 7名, 中卒 1名, 入社時職位は, 技師 2名, 技術員 3名, 工長 1名, 事務員 4名となっている。

なお, このインタビューデータは, インタビュー取材が可能で, かつ実際にインタビュー取材を行い, 入社の経緯についてまとめた聞き取りができたものを示したに過ぎない。したがって当然のことながら, 構成比率には意味はない。一方で, インタビュー対象者のプロフィールが多様であることは, 日系社員の世代と経歴との関係を明らかにしようとする本稿にとっては好都合である。

本稿の構成は以下の通りである。まず, IIにおいて, 日本のために日本語とポルトガル語の運用能力を活かしたいとの入社理由を検討し, IIIにおいて, 1930年代以降の日本語教育について検討する。IVにおいて, 待遇(給与)が良いとの入社理由を検討し, Vにおいて, ウジミナスからの要請との入社理由を検討し, VIにおいて, 未知の遠隔地であることが入社する際の最大の懸念材料であったことを明らかにし, それが入社を決意させる障害にならなかった事例も示す。VIIは結論である。

## Ⅱ 入社理由(a)日本のために日本語とポルトガル語の運用能力を活かしたい

ウジミナスへの入社に至る経緯は実に多様であるが、入社を決めた理由については類型化が可能である。すなわち、理由(a)日本語とポルトガル語の両方ができることを活かして、日本のために働きたい、理由(b)待遇、理由(c)ウジミナスからの要請、である。

なお、1960年代初頭に日系社員の採用に携わった阿南惟正氏によれば、志望動機は「日本の企業がブラジルに出てきて、日系社員を募集しているから」が最も多かったように記憶しているとしている<sup>4)</sup>。理由(a)が多数派であったということだろう。まずこの理由を検討しよう。

### 1 HM氏(1927年生まれ、高卒、1960年入社)・MS氏(1928年生まれ、高卒、1960年入社)・JO氏(1936年生まれ、高卒、1962年入社)

日本語とポルトガル語の両方ができることを活かして、日本のために働きたいとして入社したのは、コロニア(日本人・日系人集住地)で生まれ育った日系二世である。サンパウロ州リンスで生まれ育ったHM氏は、ウジミナスができると新聞で読んで、なんとか貢献したいと思っており、愛国心、日本精神があったから入社したし、入社できたことを名誉に感じたという<sup>5)</sup>。同じくリンス出身のJO氏は「俺の倅がウジミナスで働く」との入社する本人の親や周囲の人たちの期待もあったとしている<sup>6)</sup>。またサンパウロ州サントスで生まれ、日本で高等教育を受けたMS氏は、ウジミナスは日系企業であるし、日本語が達者だったので入社したとしている。

日本で生まれ育った日本人を親に持つ日系二世がコロニアで日本人として育てられた場合、「日本のために働きたい」と願うのは自然なことだと考えられる。しかし、当然のことながら「日本のために働きたい」と願うだけで、「一般常識に明るく、日本語・ポルトガル語両方の日常会話とある程度の読み書きができる」わけではない。

したがって次に問われなければならないことは、「日本のために働きたい」と願う日系二世が、どのような環境のもとで、どのように日本語とポルトガル語を身につけることができたのか、である。このことを節を変えて検討しよう。

### 2 コロニアで生まれ育った日系二世：日本語とポルトガル語の習得過程

コロニアで生まれ育ったのは、インタビューデータのうちではHM氏とJO氏、MS氏である。このうち、HM氏とJO氏は入社直前までコロニアで暮らし、MS氏は日本で高等教育を受けた。彼らはどのように日本語とポルトガル語を身につけたのだろうか。

---

4) 阿南惟正氏、2008年7月17日。

5) HM氏、2006年8月30日、2008年8月22日。

6) JO氏、2006年8月30日。

HM氏の場合。サンパウロ州リンスの「ユニオン植民地」で1927年に生まれたHM氏は、いわゆる日語学校<sup>7)</sup>である「昭和小学校」<sup>8)</sup>に通った。午前中はポルトガル語での授業、午後は日本語での授業だった。「昭和小学校」卒業後は、リンス市にある「リンス学園」に入園し、日本語を勉強し寄宿舎生活をした<sup>9)</sup>。HM氏は「リンス学園」から中学と高校へ通学した。HM氏は兄が経営するリンス市内でコーヒー焙煎工場に昼に働いて、夜に商工高校経済学科へ通い卒業した。その後兄はコーヒー焙煎工場を売却して、バス製造所の経営を始めた。HM氏はそこで販売部長としてブラジル中営業に回った。

MS氏の場合。MS氏は1928年サントス生まれ。6-7歳時に家族ともにマリリアに移動し、「マリリア日伯小学校」<sup>10)</sup>に通学した。1939年、日本(父親の出身地である沖縄)に兄とともに渡り、旧制中学に通った。中学校3年の途中で大分陸軍少年飛行兵学校に入学したが、1年足らずで終戦を迎えた。1947年前後に沖縄に戻って、新制高校3年に編入し卒業した。その後、1期生として琉球大学工学部土木学科に入学したが、1年次に退学してブラジルに戻った。ブラジルに戻った当時は、ポルトガル語が「チンブンカンブン」だったので、中学校(4年制)に入り直して勉強し、4年で卒業した<sup>11)</sup>。

JO氏の場合。JO氏は1936年サンパウロ州リンス市管轄の「タクアルス植民地」生まれ。1945年にブラジルの小学校を卒業した後は、父親が「日本語を勉強しろ」と言っていたので日本語を個人授業で学んでいた。ところが、16歳(1953年)のころに警察や市役所、銀行に行った時、そこでの会話はポルトガル語ばかりだった。このことでポルトガル語を勉強しないとダメだと気づいて、1956年にブラジルの夜間中学課程に入学した。卒業後は同じくブラジルの商業高校課程に進学し、銀行で働くなどしながら1961年12月に卒業した<sup>12)</sup>。

---

7) 日語学校とは、日本人会や日本語教師が維持経営する私立学校であり、移民の子弟たちに初歩程度の日本語を教えるだけのものから、日本語で初等の教科の全部または一部を教えるものまでさまざまである(ブラジル日系人実態調査委員会、1964、350頁)。

ただし、HM氏を通った「昭和小学校」「リンス学園」と、後述のMS氏を通った「マリリア日伯小学校」は、上記の通り日本人会の経営による私立であり、ブラジル人教員も配置されており、サンパウロ州政府公認であることから、比較的整備された日語学校であったと言える。

8) 「昭和小学校」は、1932年4月のサンパウロ日本人学校父兄会による調査によれば、所在地はノロエステ線リンス駅、昭和植民地日本人会の経営、昭和2年(1927年)設立、生徒数62名、教員は日本人男性1名、ブラジル人男性1名となっている(伯刺西爾時報社、1933、後編114頁)。

9) 「リンス学園」は、同上調査によれば、所在地はノロエステ線リンス駅、リンス中央日本人会および学園父兄会の経営、昭和5年(1930年)設立、生徒数128名、教員は日本人男性2名、日本人女性1名、ブラジル人男性1名、ブラジル人女性1名となっている(伯刺西爾時報社、1933、後編114頁)。

10) 「マリリア日伯小学校」は、1932年4月のサンパウロ日本人学校父兄会による調査によれば、所在地はパウリスタ線マリリア駅、マリリア日本人会の経営、昭和5年(1930年)設立、生徒数41名、年限4年、教員は日本人男性1名、ブラジル人女性1名となっている(伯刺西爾時報社、1933、後編113頁)。

11) MS氏、2010年9月5日。

12) JO氏、2006年8月30日、2008年8月7日、2010年8月2日、2011年11月7日付私信メール。

### 3 小括

日本語とポルトガル語の両方ができることを活かして、日本のために働きたいとして入社したのは、コロニアで生まれ育った日系二世であった。HM氏の場合、ポルトガル語は日語学校で日本語と同時並行で学び、ブラジルの中学・高校で学んだ。日本語は家庭以外では日語学校で学んだ。MS氏の場合、ポルトガル語と日本語を小学校で、その後日本に渡って日本語で大学1年まで学び、ブラジル帰国後は中学校に入り直してポルトガル語を学んだ。JO氏の場合、ポルトガル語はブラジルの小・中・高で学び、日本語は家庭以外では個人授業で小学5年生レベルまで学んだ。

3名のうち、入社直前まで同じコロニアで暮らしたHM氏とJO氏とは、小学校卒業レベルの日本語教育を受け、主としてポルトガル語を使って働きながら高校に通った点が共通している。ほぼ同年代のHM氏とMS氏とは、ポルトガル語と日本語を日語学校で学んだことが共通している。

次に、3名の相違点を挙げてみよう。高等教育をHM氏とJO氏はブラジル（ポルトガル語環境）で、MS氏は日本（日本語環境）で受けた。加えて、小学校卒業レベルの日本語教育を、ほぼ同年代のHM氏とMS氏は日語学校で、両氏よりも8-9歳年下のJO氏は個人授業で受けている。こうして見てくると、3名の日本語学習環境は相異なることがわかる。

## Ⅲ 1930年代以降のブラジルにおける日本語教育

コロニアで生まれ育った日系二世という出自を同じくし、ウジミナス入社時点で「日本語・ポルトガル語両方の日常会話とある程度の読み書きができる」人材となった3名だが、彼らの日本語学習環境は相異なるものだった。それはなぜなのか。以下、その背景を探ろう。

### 1 日語学校を含む外国語学校の全面的閉鎖への動き

『ブラジル日本移民70年史』は、HM氏とMS氏が学齢期を迎え、JO氏が生まれた1930年代を以下のように総括している。「1930年代の10年間は、わが移民史の中で一番光栄と苦難との重なり合った時代であった。一面では邦字三新聞—ブラジル時報、ブラジル朝日（旧日伯）、聖州新報が日刊となり、待望の『日本病院』は開院して、華々しい発展をみせたが、1934年7月には移民二分制限法公布のショックがあり、39年12月には外国語学校の全面的閉鎖となって、わが同胞社会では、ブラジルを見ずして帰国する者がふえた時代であった」<sup>13)</sup>。

上述の1930年代における日語学校を含む外国語学校の全面的閉鎖への動きを『ブラジル日本移民八十年史』は以下のように記述している。「サンパウロ州では1933年4月に州教育令を發布

---

13) ブラジル日本移民70年史編纂委員会、1980、309頁。

し、外国人子弟の教育に幾つかの規制を設けたが、日語小学校に直接的に打撃を与えたのは、①10歳未満の者に外国語を教えることを禁止する。②外国語の教師はブラジルの検定試験に合格した者であること。③外国語教科書は予め監督課の許可を得たものに限る。④ブラジルの国民精神の素養に有害な影響を与える教科書の使用を禁じる、などであったが、これが1938年になると、①はさらに「14歳未満の者」と制限は強化される。これらの規制のために学校の経営が不可能になり、サンパウロ州当局によって閉鎖命令を受けた学校は日本人関係219校、ドイツ人関係7校、イタリア人関係5校、ポルトガル人関係4校、計235校に達したのであった」<sup>14)</sup>。

1933年に「10歳未満の者に外国語を教えることを禁止」され、1938年に「14歳未満の者」と制限が強化されたのなら、1933年当時5-6歳、1938年当時10-11歳であったHM氏とMS氏は、まったく日本語教育を受けることができなかったはずである。にもかかわらず、彼らは日語学校（昭和小学校、マリリア日伯小学校）に通い、日本語を学んでいたと証言している。このことは、下記に示される1930年代における日語学校数・生徒数の推計によっても裏付けられる。

## 2 1930年代における日語学校数・生徒数の推計

サンパウロ日本人学校父兄会調査によれば、HM氏やMS氏が小学校に入学する直前の1932年4月現在187校9,187名となっている<sup>15)</sup>。この調査結果には「既に開校を見たるも未だ届出ざるもの約20校」が含まれていないとの記述が添えられているが、一方でパラナ州とマツグロソ州の日語学校も含まれているので、ブラジルにおけるほとんどの日語学校が網羅されているとみなしうる。

1930年代末時点の学校数・生徒数については、これまでにいくつかの推定がなされている。『ブラジルに於ける日本人発展史』では、ブラジルにおける日本人小学校は「昭和14年3月現在では、学校数486、その内調査済384校の児童数19,463名で、未調査の分を入れると、恐らく3万に達するであらうと言はれた」<sup>16)</sup>としている。

一方、ブラジル日本移民70年史編纂委員会は、1939年当時の日語学校生徒数を以下のように推計している。「ここに日本語学校及びその生徒数のあらましをあげてみると、1939年におけるサンパウロ州の日本人学校は294校（パウリスタ延長線教育史76頁）であるが、これはブラジル政府側の調査によるものであるのかこの年の10月21日のブラジル時報紙の報道によると日本人小学校は476校、教員数554名（内男468名、女86名）であって、そのうちブラジル学務局からみとめられた有資格者は276名であった。これはパウリスタ延長線教育史の日本人小学校数とやや一致するから、日本人小学校として正式にみとめられていたものは一日本語教師のいるいないにかかわらず—290余校であったのかも知れない。なお、生徒数にしてみると、一校

14) ブラジル日本移民80年史編纂委員会、1991、80頁。

15) 伯刺西爾時報社（1933）、後編108頁。

16) 青柳郁太郎（1953）、199頁。

平均50名以上はかんがえられないからたとえ400校あったとしても、二万にみたない数ではあった」<sup>17)</sup>。

さらに、ブラジル日本移民80年史編纂委員会は、1938年当時の日語学校生徒数の正確な把握は困難であるとしながらも以下のように推定する。「1933年4月の『日本人教育普及会』調査の187校、9,178人、1校平均49.1人から6年を経ていることと、1930年代の前半は最も多くの日本移民が渡来した時代であり、農村部、都市部共に日本人社会が全般的に最も旺盛な活力をもった時代であったから、1校の平均生徒数もかなり増えていたと考えられ、仮りに対1932年比5%の増加とみても1校が54名となり、476校で2万5千名弱となる」<sup>18)</sup>。

以上の3者による推計の間には1万名ほどの差があるが、1932年におよそ1万名であった日語学校の生徒数はその後倍以上に増加して、1930年代末時点には2-3万名に達していたと表現することはできよう。つまり、1933年に「10歳未満の者に外国語を教えることを禁止」され、1938年にそれが「14歳未満の者」とされたにもかかわらず、その後1930年代末まで日語学校で学ぶ生徒は少なく見積もっても倍増した。1930年代は「80数年の日本語教育史上、最盛期として位置づけられるべきもの」<sup>19)</sup>なのである。

### 3 1930年代末に日本語教育が実質的・全面的に禁止

この事態を理解するには、伯国日語学校連合会が編集した『幾山河：全伯日語教育史』の以下の記述が役に立つ。「1935年頃より急速に台頭して来たブラジルのナショナリズムの煽りを食って、教育局も邦人小学校に対し、従前通り黙認の形で放置するわけにはいかなくなり、地方の視学を督励して教育の内情を摘発させるような事態が生じた。教育普及会も改称後幾ばくもなく、情勢の推移を顧慮して文協普及会と改め、当局との摩擦を防ぎながら、日語教育の推進をはかった」<sup>20)</sup>。つまり、法的に日本語教育が禁止された後も、しばらく当局は黙認していたわけである。1938年の外国語学校閉鎖令によって初めて、日本語教育が実質的・全面的に禁止されたということであろう。

その後の日本語教育はどうなっていったのか。『ブラジル日本移民八十年史』には以下の記述が見られる。「1937年、38年頃からの10年間くらいは日系社会の“暗黒時代”といってよい時期であって、恐らく日本語による児童教育など到底考えられない状況であった。…それまでコロニアにおいて日本語教育に大きな役割を果たしてきた『日語学校』は、非合法的再開に対する自粛を最大の理由として、1950年代に入るまで再開されなかった」<sup>21)</sup>。このため、ブラジ

---

17) ブラジル日本移民70年史編纂委員会 (1980), 309頁。

18) ブラジル日本移民80年史編纂委員会 (1991), 81頁。

19) 森脇礼之 (1998), 77頁。

20) 伯国日語学校連合会 (1966), 110頁。

21) ブラジル日本移民80年史編纂委員会 (1991), 385-386頁。



ルの将来を悲観した親が日本に子弟を送り出し、日本で教育を受けさせる動きも生じた<sup>22)</sup>。

#### 4 小括

第1節では、1933年に「10歳未満の者に外国語を教えることを禁止」され、1938年に「14歳未満の者」と制限が強化されたにもかかわらず、1933年当時5-6歳、1938年当時10-11歳であったHM氏とMS氏は、日語学校に通い、日本語を学んでいたことが明らかとなった。第2節では、1932年におよそ1万名であった日語学校の生徒数は、その後1930年代末まで少なく見積もっても倍増したことが明らかとなった。第3節では、サンパウロ州のコロニアの日本人にとつての日本語教育環境が一変し、日本語教育が実際に極めて困難になったのは1930年代末であることがわかった。

以上より、わかることは下記の通りである。1930年代末までは禁止されたはずの日本語教育が黙認されており、HM氏とMS氏は日語学校で日本語を学ぶことができた。一方で、1936年生まれのJO氏は、日本語教育が実質的・全面的に禁止された1930年代末からの10年間に学齢期を迎えた。だからこそ、日語学校に通学することが叶わず、日本語を学ぼうとしたら家庭教師に頼る他なかったのである。こうした状況を鑑みて生じた子弟を日本で教育する動きの一部として、MS氏は1939年に兄とともに日本に渡った。

これがコロニアで生まれ育った日系二世という出自を同じくし、ウジミナス入社時点で「日本語・ポルトガル語両方の日常会話とある程度の読み書きができる」人材となった3名の日本語学習環境が相異なるものになった背景である。

#### IV 入社理由(b)待遇

もう一つの類型は、待遇面、とくに給与が高いことからウジミナスへ入社を希望したことである。これは日系二世にもみられるが、戦後移民に顕著である。インタビューデータでは、WK氏、YI氏、TM氏、FK氏がこれに該当する。

##### 1 WK氏（1933年生まれ、中卒、1956年渡伯、1962年入社）

当時のウジミナスの給与額について、1933年生まれ、家族全員で農業移民として1956年、23歳で渡伯し、入社前にはサンパウロ州リンスにあるコーヒー農場で働いていたWK氏は以下のように述べている。ウジミナスが提示した給与額は、最低ランクのオペラドールCであってもリンスでの最低賃金額の2倍であった。工長となれば最低賃金額の3倍だった。当時、WK氏の兄（AK氏）はリンス市街地で製糸会社で働いていたが、給与は最低賃金額であったし、弟

---

22) 「教育国粹旋風の祟り：可愛い子供の教育は日本で：第二世の帰国者続出」『日伯新聞』1939年1月11日付。

2人は1ヶ月2人合わせて1人分の最低賃金額でコーヒー農場で草かきの仕事をしていた。

1962年に入社試験に受かって、ウジミナスに入社するかどうか迷っていた時に、リンス市街地に出かけて日本人に相談しにいった。その人たちは口を揃えて「そんなところ行ったら大変だ」「リンスに帰って来れなくなる」「だまされているだけだ」。リンスの日本人にも、これだけの給料を本当に出すのか、にわかには信じられなかったようだ<sup>23)</sup>。しかしながら、弟たちに相談すると「ここにいてはどうしようもない。3人だから、陸続きだからなんとかできるので行こう」となり、入社を決めたという<sup>24)</sup>。

## 2 YI氏 (1936年生まれ、高卒、1956年渡伯、1962年入社)

1936年に生まれ、1956年に20歳で呼び寄せ移民（農業移民）として単身ブラジルに渡り、入社前にはサンパウロ州マリンガの日系の自動車修理工場で働いていたYI氏は、こう語っている。「なぜウジミナスに入社したかったかと言えば、給料と待遇が良かったからだ。ウジミナスが提示した給料は、その当時自分がもらっていた給料の3倍だったし、赴任するための旅費も負担してくれるし、寮もあるとのことだったからだ」<sup>25)</sup>。

## 3 TM氏 (1938年生まれ、高卒、1959年渡伯、1962年入社)

1938年に生まれ、工業高校電気科卒業後、2年間電気技師として働き、1959年に両親とともに農業移民として渡伯し、パラナ州ロンドリーナに入り、電機メーカーで働いていたTM氏は、こう語っている。「ウジミナスが社員を募集していることは、ロンドリーナで日本語ラジオ放送か邦字新聞で知った。給料が魅力的だったので、1962年ごろにロンドリーナで父と弟とともに入社試験を受けた。1962年8月に（技術員）としてウジミナスに入社した」<sup>26)</sup>。

## 4 FK氏 (1940年生まれ、高卒、1959年渡伯、1962年入社)

1940年中国に生まれ、1945年に日本に引き上げた後、1959年に18歳で家族とともに渡伯し、入社前にサンパウロ州モジ・ダス・クルーゼスの果樹園で働いていたFK氏は、こう語っている。「渡伯後の収入は、1ヶ月日曜も含めて働いても米一俵60kg（5クルゼイロ）を買えるほどでしかなかった。ウジミナスの提示する月24クルゼイロは魅力的であった」<sup>27)</sup>。

---

23) WK氏, 2010年8月14日。

24) WK氏, 2010年8月14日。

25) YI氏, 2010年8月20日。

26) TM氏, 2010年8月15日。

27) FK氏, 2008年8月11日。

## 5 なぜ戦後移民はウジミナスの給与に魅力を感じたか

前節で触れたように、ウジミナスが提示した給与額は、入社前の給与（所得）額に比して顕著に高かった。戦後移民が待遇面、とくに給与が高いことをウジミナスへの入社理由とした背景には何があったのか。以下検討する。

1957年に農業移民として渡伯し、1960年のウジミナスへの入社動機を「就職難」としたSK氏は、以下のように記している。「当時、戦後の私の場合の様な独身農業移民はジャポンノーボと云われ喰わしてやればただで使えるという最低人種でした。其がウジミナスの社員となられぞれ箔をつけて後の社会に出て行けたと思います。云はば救いの神だったと思います」<sup>28)</sup>。

この調査を行った土屋秀人氏（1957年に外務省海外商業実習生として渡伯し、1961年ウジミナス入社）は以下のように語っている。「当時日本は不景気で、日本政府は『海外に飛躍せよ』として海外移民を推奨していた。戦後移民は『海外に飛躍』して、農業移民としてブラジルに入り、農業に携わるが、待遇が悪く彼らの期待に沿わないものであった。そこで、彼らは農業から離れて街（サンパウロ市）に出て、働き口を探した。しかし、ポルトガル語もできないし、労働手帳を持っていないので、最低賃金を下回る安い賃金での働き口しかなかった。当時の戦後移民はそうした状況にあったので、ウジミナスの日系社員の募集は「時を得た」ものだった<sup>29)</sup>。

戦後移民がほとんどが農業移民であったことは、統計によって裏付けることができる（表3）。

表3 ブラジルへの移住者（1952-1965年）

		1952	1953	1954	1955	1956	1957	1958	1959
農業	自営開拓	0	1,128	1,182	110	492	467	282	545
	公募雇用	54	271	2,058	1,745	2,202	1,707	1,592	2,356
	指名呼寄	0	65	280	765	1,641	2,958	4,377	4,038
技術		0	16	4	37	35	17	50	92
その他		0	0	0	0	0	23	11	10
計		54	1,480	3,524	2,657	4,370	5,172	6,312	7,041
		1960	1961	1962	1963	1964	1965	計	
農業	自営開拓	690	902	331	285	157	38	6,609	
	公募雇用	2,895	1,145	309	239	134	125	16,832	
	指名呼寄	3,106	2,963	1,105	603	154	38	22,093	
技術		123	122	71	89	108	169	933	
その他		18	14	14	14	198	161	463	
計		6,832	5,146	1,830	1,230	751	531	46,930	

（註）「自営開拓」とは、国際協力事業団または受入国の移住地に自営農として入植した者。「公募雇用」とは、国際協力事業団、コチア産組等のあっせんにより雇用農として渡航した者。「指名呼寄」とは、知人などの指名により渡航したもの及び近親者。

（出所）国際協力事業団『海外移住統計』1994年、42-43頁。

28) 土屋秀人（2010）。

29) 土屋秀人氏、2012年4月3日（電話取材）。

この表によれば、1952-1965年まで日本からブラジルへ46,930人が移住しているが、このうちの97.0%が農業移民である。インタビュー対象者として今回取り上げた6名が渡伯した年でみると、1956年4,370名のうちの99.2%、1959年7,041名のうち98.6%が農業移民である。

## 6 小括

第1-4節のインタビューデータから言えることは、全員が農業移民として渡伯したこと、ウジミナスが提示した給与額は、入社前の給与（所得）額に比して、顕著に高かった（およそ2-3倍）ということである。第5節から言えることは、戦後移民（農業移民）は、労働手帳を取得することが困難で最低賃金を下回るものしかなかったため、ウジミナスの待遇（給与）は相対的に高く、より魅力に感じられただろうこと、ポルトガル語運用能力が十分ではない戦後移民にとって日本語を使える職場はより魅力に感じたであろうことである。苦境にあった戦後移民にとってウジミナスは、「救いの神」とも言える存在だった。

給与が高いことを入社理由としたWK氏、YI氏、FK氏、TM氏は、いずれも農業移民であり、入社前には最低賃金以下の所得しか得られていなかった。だからこそ、ウジミナスの給与水準が労働手帳保有者よりも高く感じ、それが入社理由となったのである。これが、戦後移民が待遇面、とくに給与が高いことがウジミナスへの入社理由となった背景であると考えられる。

## V 入社理由(c) ウジミナスからの要請

第3の類型は、ウジミナスからの要請に基づいての入社である。これは技師と技術員にみられる。インタビューデータでは、IY氏、HS氏、AK氏がこれに該当する。

### 1 IY氏（1922年生まれ、大卒、1958年入社）

IY氏は1922年に東京で生まれ、1929年に家族に連れられて渡伯した。1945年に大学（土木工学専攻）を卒業後、設計会社や建設会社を転々としながら仕事をしてきた。

1958年11月ごろ、基礎設計・基礎工事専門企業の日本語通訳として、ウジミナスを訪問した。この訪問には、日本（八幡製鉄）から派遣されていた土木関係の課長が応対したが、IY氏に向かって「そういう経験を持っている人は、ウジミナスに入社してもらわないと困る。是非入社していただきたい」と言った。この時、IY氏は「せっかくそこまで言ってくれるなら、2年間ウジミナスで働いてみようか」と思い、1958年12月に土木技師として入社した<sup>30)</sup>。

---

30) IY氏、2006年8月28日、2008年8月9日。

## 2 HS氏（1924年生まれ、大卒、1958年入社）

HS氏は、1924年サンパウロ州リンス生まれ。日本に渡って熊本工業専門学校（熊本大学の前身）に入学して1946年に卒業し、熊本県土木部に就職した。ここで2年間ほど働いたが、ブラジルにいたHS氏の父親の求めに応じて1949年に渡伯した。

渡伯後は父親とともにファゼンダ（農場）を開くことがHS氏の仕事になったが、それが一段落した1954-55年ごろサンパウロ市内に移動した。サンパウロでは昼間は土木技師として日系二世が経営する設計事務所で働き、夜はコレジオに通ってポルトガル語を勉強した。

1958年5月末か6月初めに、ウジミナスからのHS氏が働く設計事務所に協力依頼があり、HS氏がウジミナスのリオ事務所に行ったところ「すぐに来てくれ」と言われた<sup>31)</sup>。

## 3 AK氏（1930年生まれ、高卒、1962年入社）

AK氏は1930年生まれ。家族とともに農業移民として1956年渡伯後、しばらくコーヒー農場で働くが、リンス市内に出て工場などで働くようになった。

ウジミナスが設立され、人員募集がリンスでも行われることを知り、いち早く入社試験を受け合格した。しかし、家族を置いて単身でイパチンガに行くのが嫌で赴任することをやめてしまっていた。AK氏の後に入社試験に合格し、AK氏よりも先に入社したWK氏が、計装部門の日本からの派遣者に長兄（AK氏）について話しをしたところ「是非来てほしい」との言質をとった<sup>32)</sup>。

## 4 小括

こうして見ると、ウジミナスからの要請があって入社した日系社員は、高卒以上の技術系の学歴と専門職務の経験を有していることが共通している。HS氏とIY氏は工科大学を卒業してすでに技師として働いていたし、AK氏は工業高校を卒業してラジオ修理店などで働いていた。また、入社年齢が30代であることも共通している。こうした3名にウジミナスの入社要請があったということは、日系の技師と技術員が特に不足していたことを物語っている。

## Ⅵ 入社を決める際の懸念材料

サンパウロ州のコロニアやサンパウロ市内で暮らしてきた者にとって、ウジミナス入社を決める際の最大の懸念材料は何であり、それが日系社員の世代や経歴といかなる関係が見られるのか。

---

31) HS氏，2006年6月14日，2008年8月19日。

32) WK氏，2010年8月14日。

## 1 ウジミナスが未知の遠隔地にあること

ウジミナス入社を決める際の最大の懸念材料は何であったのかを探るには、IV第1節で示した「そんなところ行ったら大変だ」「リンスに帰って来れなくなる」「だまされているだけだ」とのリンス市街地での日本人の反応が参考になる。実際に、この反応を家族に伝えたWK氏の兄で、結婚し子供がいたAK氏は、ブラジルはリンス以外知らなかったし、当然ミナス・ジェライス州がどのようなところなのか見当もつかない。「わけのわからないところに行くわけにはいかない」と考えて、先に弟たちをウジミナスに入社させたという<sup>33)</sup>。

ミナス・ジェライス州が未知の土地であることは、当時サンパウロ市ですでに技師として働いていたHS氏にとっても同じだった。ペロ・オリゾンテも含めてミナス・ジェライス州には行ったことがなく、イパチングもどこにあるのか見当がつかなかったとしている<sup>34)</sup>。同じくサンパウロ市ですでに技師として働いていたIY氏は、1958年初めにサンパウロで二世を集めてウジミナスの説明会に参加したが「ミナスの奥地に行くのはおっくうだ」と思って聞き流していたという<sup>35)</sup>。それほどミナス・ジェライス州は縁のない土地だったのである。もちろん、結果的には上記3名はウジミナスに入社するが、先述した通りこの3名がウジミナスから乞われる形で入社したことは興味深い。

さらに、WK氏によれば、本人が受けた1962年にリンスでの入社試験で合格した62名の半分も入社していない。入社したのは10人程度だとしている<sup>36)</sup>。このことからすると、採用試験に合格したが入社しなかった者も少なくなかったと考えられる。日系企業による募集かつ提示された待遇が格段に良いにもかかわらず、合格者が入社しなかった理由は多様であろう。しかし、先述したリンス市街地の日本人の反応とインタビューデータからみて、やはり遠く未知の土地であることが大きかったと考えられる。

ウジミナス入社を決める際の最大の懸念材料は彼らにとって、当時のミナス・ジェライス州ペロ・オリゾンテ／イパチングは遠く未知の土地であったことである。こうした懸念は世代や経歴に関わりなく共通してあるが、とくに入社前にすでに社会的評価の高い職業（技師）に就いていた者や妻子があった者にそうした懸念が強かったようである。

## 2 未知の遠隔地であることが障害にならなかった事例

一方で、未知の遠隔地であることが入社を決意する障害にならなかった事例もある。二世のMS氏と戦後移民のWK氏とFK氏の事例である。MS氏は当時サンパウロ市内の日系の機械工場で働いていたが、ペロ・オリゾンテに来ることは全く抵抗なかったという。WK氏は、IV第

---

33) MK氏, 2010年8月11日。

34) HS氏, 2008年8月19日。

35) IY氏, 2006年8月28日。

36) WK氏, 2010年8月14日。

1 節で示した通り、リンス市内の日本人に反対されながらも「ここにいてはどうしょうもない」として入社を決意した。また、FK氏は「パラナ州の田舎で暮らしていたことがあったので、奥地のペロ・オリゾンテやイパチングに行くことにはためらいがなかった」<sup>37)</sup>としている。

こうして見てくると、WK氏とFK氏は入社以前の生活が楽ではなかったこと、あるいは、将来に希望を見いだせない現実と直面していた。したがって彼らにとっては、ウジミナスが未知の遠隔地にあることは、直面する問題の前では懸念材料にはならなかったと考えられる。なお、MS氏について言えば、Ⅱで触れたように、日本のために日本語・ポルトガル語運用能力を生かしたいとの思いが強いがために、ウジミナスが未知の遠隔地であることは問題にならなかったと考えられる。

### 3 小括

第1節では、遠く未知の土地であるという懸念は、世代や経歴に関わりなく共通しており、とくに入社前にすでに社会的評価の高い職業（技師）に就いていた者や妻子があった者にそうした懸念が強かったことが示唆された。第2節では、入社以前の生活が楽ではなかったか、将来に希望を見いだせない者にとっては、ウジミナスが未知の遠隔地にあることは、懸念材料にはならなかったことが明らかとなった。

以上より、遠く未知の土地であるという懸念は、入社前にすでに社会的評価の高い職業（技師）にあった者や家族があった者には強く、入社以前の生活が楽ではなかったか、将来に希望を見いだせない者には強くはなかったと言えよう。

## Ⅶ おわりに

本稿の課題は、日系社会の優れた人材たる彼らをしてウジミナスへ入社せしめた事情にはいかなるものがあり、それが日系社員の世代や経歴といかなる関係が見られるのかを明らかにすることであった。

Ⅱにおいては、下記のことが明らかとなった。日本語とポルトガル語の両方ができることを活かして、日本のために働きたいとして入社したのは、コロニアで生まれ育った日系二世であった。入社直前まで同じコロニアで暮らしたHM氏とJO氏とは、小学校卒業レベルの日本語教育を受け、主としてポルトガル語を使って働きながら高校に通った点が共通している。ほぼ同年代のHM氏とMS氏とは、ポルトガル語と日本語を日語学校で学んだことが共通している。

一方で、相違点も目立つ。高等教育をHM氏とJO氏はブラジルで、MS氏は日本で受けた。加えて、小学校卒業レベルの日本語教育を、HM氏とMS氏は日語学校で、JO氏は個人授業で

---

37) FK氏, 2008年8月11日。

受けている。3名の日本語学習環境は大きく相異なっている。

その背景は、Ⅲにおいて明らかにされた。すなわち、1930年代末の日本語教育の実質的・全面的禁止である。1930年代末までに学齢期を迎えたので、日語学校に通学できたが、その後に学齢期を迎えたJO氏は、日本語教育は家庭教師に頼る他なかったし、MS氏は1939年に日本に渡って高等教育を受けたのである。

Ⅳにおいては、以下のことが明らかとなった。待遇（給与）が良いことをウジミナスへ入社理由にしたのは戦後移民に顕著である。その背景には、彼らが農業移民であり、入社前には最低賃金以下の所得しか得られていなかったために、ウジミナスの給与水準が労働手帳保有者よりも高く感じたことがある。

Ⅴにおいては、技師と技術員にみられるウジミナスからの要請を入社理由としたケースを検討した。その結果、入社年齢が30代であり、高卒以上の技術系の学歴と専門職務の経験を有していることが共通していることが明らかになった。こうした3名にウジミナスの入社要請があったということは、日系の技師と技術員が特に不足していたことを物語っている。

Ⅵにおいては、入社を決めるにあたっての懸念材料である遠く未知の土地であることが、世代や学歴の違いによって受け止めが異なるのかを検討した。その結果、この懸念は世代や経歴に関わりなく共通してあるが、入社前にすでに社会的評価の高い職業（技師）にあった者や家族があった者には強く、入社以前の生活が楽ではなかったか、将来に希望を見いだせない者には強くはなかった。

以上より、日本語とポルトガル語の両方ができる日系二世は日本のために働きたいから、当時苦境にあった戦後移民（一世）は給与が高いから、世代を問わず高卒以上の技術系の学歴と専門職務の経験を有している者は、入社前にすでに社会的評価の高い職業（技師）に就いていたか妻子持ちであったが、ウジミナスからの要請により、入社したというおおよその構図を描くことができる。

では、そうしてウジミナスに入社した彼らは、入社後ウジミナスにおいてどのような役割を果たしたのか。ウジミナスの要請に基づいて入社した技師・技術員たちは、事務員・工長として採用された日系二世・戦後移民は、どのような役割を果たしたのか。日系社員たちは日本側とブラジル側の間でどのように行動し、どのような役割を担ったのか。日系社員のどのような働きが大きく異なる両国の言葉と文化を乗り越えることにつながったのか。次の課題である。

※本稿は、平成22年度関西大学在外研究、および科学研究費補助金（課題番号22530342）による研究成果の一部である。



## 参考文献

- 青柳郁太郎（1953）『ブラジルに於ける日本人発展史』ブラジルに於ける日本人発展史刊行会。  
 伯刺西爾時報社（編）（1933）『伯刺西爾年鑑』。  
 ブラジル日系人実態調査委員会（編）（1964）『ブラジルの日本移民』（記述篇）東京大学出版会。  
 ブラジル日本移民80年史編纂委員会（編）（1991）『ブラジル日本移民八十年史』移民80年祭祭典委員会・ブラジル日本文化協会。  
 ブラジル日本移民70年史編纂委員会（編）（1980）『ブラジル日本移民70年史』ブラジル日本文化協会。  
 伯国日語学校連合会（編）（1966）『幾山河：全伯日語教育史』。  
 長谷川伸（2009）「ウジミナス建設・操業開始期における日系社員の採用」『関西大学商学論集』第54巻第2号。  
 森脇礼之（1998）「日本語教育の理念の変遷」『人文研』（サンパウロ人文科学研究所）第2号。  
 土屋秀人（編）（2010）「ブラジル日本移民百周年記念事業作成資料：ウジミナスは我々にとって如何なる存在であったか？」（部内資料）。  
 「教育国粹旋風の祟り：可愛い子供の教育は日本で：第二世の帰国者続出」『日伯新聞』1939年1月11日付。

## 聞き取り記録ほか

- FK氏，2008年8月11日。  
 HM氏，2006年8月30日，2008年8月22日。  
 HS氏，2006年6月14日，2008年8月19日。  
 IY氏，2006年8月28日，2008年8月9日。  
 JO氏，2006年8月30日，2008年8月7日，2010年8月2日，2011年11月7日付私信メール。  
 MK氏，2010年8月11日。  
 MS氏，2010年9月5日。  
 TM氏，2010年8月15日。  
 WK氏，2010年8月14日。  
 YI氏，2010年8月20日。  
 阿南惟正氏，2008年7月17日。  
 土屋秀人氏，2012年4月3日（電話取材）。